ISSN 1346-1990

J-STAGE NEWS J-STAGEニュース

No.16
2008年3月21日発行
科学技術振興機構

科学技術論文発信・流通促進事業アドバイザー委員会報告

研究基盤情報部電子ジャーナル企画課

科学技術論文発信・流通促進事業アドバイザー委員会は、JSTが運営している科学技術論文発信・流通促進事業（以下J-STAGE事業）の実施方針等を検討するために平成19年10月に設置され、第1回本委員会（平成19年11月13日）以降、J-STAGE事業の今後の実施方針等に関する検討を行ってきました。本号では、平成20年3月6日の第2回本委員会で報告された「平成19年度本委員会報告書」の内容について概要をご報告します。

平成20年2月末時点でJ-STAGEに参加している学協会は488、公開している誌数（ジャーナル、予稿集、報告書等）は589誌に登っており、日本の学協会誌の国際発信及び学協会支援は一応の成果をあげていると言えます。
しかしながら、一方で最近の学協会を巡る厳しい動向や国内誌の電子化の遅れへの対応、機能向上等、課題も数多くあると認識しており、学協会誌の電子化を支援し国内外に公開するという第一義的な目的に加え、公開後の学協会のさらなる発信力強化と普及促進に向けた新たな方策の検討が急がれるところであります。本委員会では、現状の問題点や要望事項、課題について整理し、各種の調査結果を経て、今後の事業改善の方向性について提言されました。

今後の方向性として、登載学協会誌数の拡大と電子化支援を継続しつつ、研究成果の国際発信力のさらなる強化と学協会誌の普及を支援し、有力な学協会誌の海外発信力強化にも傾注していくことが重要であり、海外への普及促進については、学協会自身の取り組み状況を勘案し、当面英文誌を中心に実施していくことが望まれます。

以下に、取り組むべき課題の一部について項目のみ列記します。

◆システム機能改善（改造要望に挙がっている項目の早急な着手と海外の電子ジャーナルプラットフォームに比肩する機能の具備）
◆学協会とのコミュニケーション強化（意見交換会等の開催方法の改善と利用学協会Webサイトの運営等）
◆広報・普及活動（国内、国際会議への展示等）
◆海外への普及促進（プロモーション）（J-STAGE登載誌の海外データベースへの収録、海外の代表的電子ジャーナル検索サイトへの参加検討等）
◆基準の明確化（J-STAGE利用基準等の明確化）
◆コストパフォーマンスの改善

JSTは、本委員会で提言された内容について早急に着手に向けて検討を行い、即実施可能なものから優先度をつけて取り組むこととしています。紙面の都合上、全てをご紹介することはできませんが、詳細は別の機会に改めてご報告いたします。

Online Information 2007、STMセミナー（E-Production Seminar, Innovations Seminar）

この度J-STAGEアドバイザー委員会WG主査の立場で、昨年12月にイギリスのロンドンで行われたOnline Information 2007の展示ならびに、STM E-production SeminarとInnovation Seminarに参加しました。一般的な集会報告として情報管理誌3月号に掲載されていますが、今回、よりJ-STAGE向けの話に絞って少し違った角度から所感を述べたいと思います。

まず、世界最大規模の情報産業関連のシンポジウムであるOnline Informationの展示に参加してきました。この展示では、エルゼビアを含む大手商業出版社と大手学会系出版社がこぞってブースを出して、自社製品をPRしています。今回この展示を通じて感じたことは、電子ジャーナルサービスの成熟です。実は昨年の前に、一昨年2006年と2002年にも参加した目で見ますと、明らかに内容が落ち着いた雰囲気を感じます。悪く言ってしまえば、わくわく感が減っています。電子ジャーナル化は当たり前となった今、電子ジャーナルで何ができるかという局所的な視点からは離れ、この電子ジャーナル化された情報が社会インフラまで考慮してどのように流通するかを考えるべきときなのでしょう。それは次に参加したSTMセミナーと合わせて検索というトピックで議論されました。すなわち、出版社の関心の一つが検索に移っています。必要な研究者コミュニティから必要な情報を、それすなわち自分達が出版する情報をいち早く手に入れてもらうためにはどうすればよいか。

かつて、いや、今もGoogleがあればいいじゃないかという話がありますが、最近はどうでしょう。SEOを駆使した営利目的のサイトが上位リストに来たり、時には、アフィリエイト稼ぎのためのサイトばかりヒットしたりするなど、いわゆるノイズの多さが目立ってきているように思います。こうなると、特に研究者は必要な情報群を網羅性よく検索できる環境を望むのは無理ないことでしょう。その意味では科学系の学会出版社が連合して立ち上げたScitopiaが試金石になると思われます。これはアメリカ物理学会やIEEEなどが中心となって、学術・科学技術情報の検索ポータルを設立したもので、研究者はここを訪れればノイズが少ないアカデミックな情報源から検索が可能となる予定です。この仕組みがうまくいくのか、Googleがあれば良いのか今しばらく目が離せない状況になると思います。

続いて、STMセミナーに二日間参加しました。このセミナーは、まさに我々のような学術出版に携わる人材が集まって事例紹介と議論を行うセミナーです。まず、最初のプロダクションセミナーでは、アーカイブ、アウトソース、内部事務インフラについての事例紹介がありました。それぞれのトピックごとに、出版社ごとにアーカイブデータが少しずつ違っているのをまとめる苦労、業務を（海外）アウトソースする際の心構えとコミュニケーションのキモ、そして、大手出版社ならではの内部業務フローの電子化の苦労と実際について議論されました。そもそも欧米のリソースの多さ、多様さをうらやましく思いながらも興味深く聴きました。

翌日のイノベーションセミナーでは、まず、いわゆるweb2.0に学術出版社が対応すべき時に来ていることが議論されました。フォークソノミーやコンシューマージェネリックメディア（CGM）が学術出版にどのような影響を実際与えるか。情報の質をコントロールする手段として一部の専門家だけに頼らなくても良くなる、あるいは、これまで時間をかけて行っていた評価や知識の構築が瞬時に大衆によって行われる。学術知識構造構築の根本を場合によっては覆しかねないこのような動きは、すぐに我々の実務に影響が出るとは思えませんが、常に見張っておくべきことでしょう。続いてより具体的かつ近い将来起こりうる新しい動きもいくつか紹介されました。特にOpenIDの思想に基づく、著者同定の時代が近づいています。CrossRefもOpenIDの仕組みを取り入れる予定で、CrossRefを通じて、ある著者の論文はこれとこれ、と簡単に仕分ける時代が近づきつつあるようです。

最後にプログラムの都合上参加できなかったe-Bookセッションでも様々な試みが紹介され、いよいよ電源を切っても文字が消えない電子インクの実機が紹介されていました。ただし、e-Bookビジネス自体はなかなか大変なようで、苦労話が報告されたと伺っています。これも、幸か不幸か日本の学術系e-Bookビジネスがほとんどないために比較のしようがありませんが、参考になる情報です。 2002年から断続的に参加しているこのセミナーでは、必ず欧米との差を目の当たりにします。これを真正面から正直に受け止めすぎて悲観的になるのではなく、良いお手本があると捉えなおして少ないリソースを効率的に利用して日々の改善に努められればと改めて思った次第です。

満足度調査実施結果報告

◆J-STAGE利用学協会満足度調査を実施しました。

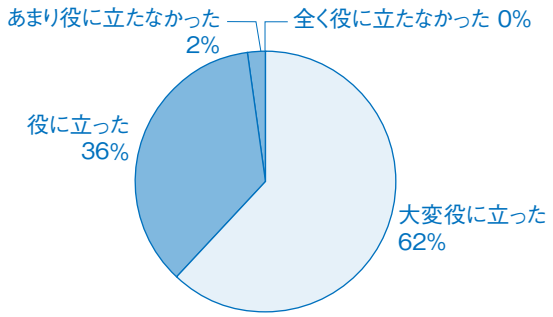
平成20年2月13日（水）～2月22日（金）にかけて、J-STAGEでジャーナルを公開している学協会様対象に、発行ジャーナル毎にJ-STAGEをご利用いただいての満足度を、メール本文でのアンケート形式でお聞きしました。

アンケートを399誌にお送りした結果、189誌から回答をいただきました。（回収率47.4%）。以下アンケート内容概要および結果をお知らせします。

〈アンケート内容概要〉

- J-STAGEは役に立ったか（1項目の4段階評価）
- 役に立った理由（複数回答可の5択）
- J-STAGEの機能（7項目の4段階評価）
- J-STAGEからの広報・普及活動（1項目の4段階評価）
- 他の学協会との交流・情報交換（1項目の4段階評価）
- 総合的に見たJ-STAGEの満足度（1項目の4段階評価）
- 今後のJ-STAGEの期待度（1項目の4段階評価）
- J-STAGEに期待する項目（複数回答可の5択）

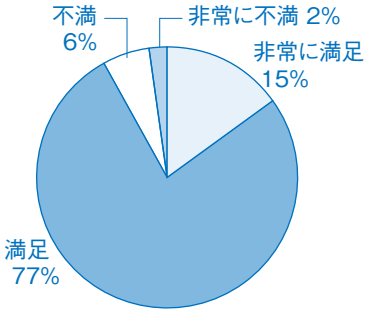
Q2 J-STAGEは役に立ったか



〈アンケート結果〉

J-STAGEが役に立った、大いに役に立ったを合わせると98%となり、役に立った理由としては、登載誌の国際発信力が強化されたが31%、出版工程の電子化による合理化が21%、論文の収集が容易になったが20%、投稿論文数の増加が15%、その他が13%でした。その他の記述では、「他のデータベース等連携が図れ双方の補完ができた」「投稿が増えた」「公開までの期間が短縮された」「ジャーナルの知名度が高くなった」といったご意見がありました。J-STAGEの機能については、画面（デザイン）、操作性、公開機能（リンク機能含む）、制作・編集機能、投稿・査読・審査機能、登載ジャーナル数・総論文数、速報性について4段階評価で

Q7 総合的に見たJ-STAGEの満足度

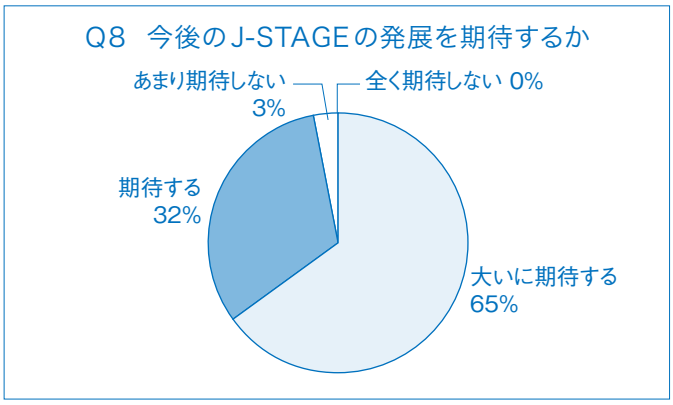


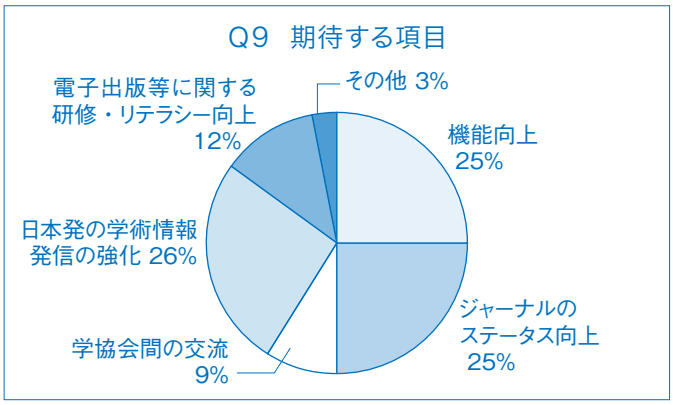
お聞きしました。上記設問7つのうち6つについては、「非常に良い」もしくは「良い」が80%以上でしたが、「検索機能の不備」等を指摘する意見がありました。また、投稿・査読・審査機能については、「非常に良い」もしくは「良い」との回答は「非常に悪い」もしくは「悪い」の4倍でしたが、システムの操作性の悪さに対する指摘が複数ありました。

J-STAGEの広報・普及活動、他の学協会との交流については、多くの学協会が否定的な回答で、意見交換会の頻度の増加や地方開催の要望、J-STAGEニュースの発行回数等、広報活動の強化、海外への宣伝活動等を要望する意見が寄せられました。

総合的に見たJ-STAGEの満足度は、「常に満足」もしくは「満足」で92%でしたが、「不満」もしくは「非常に不満」と答えた方からの具体的要望としては、「操作性についての改善要望」、「国際的なジャーナルの情報発信力や知名度を上げるための取り組みへの要望」が多く見受けられました。

今後のJ-STAGEへ期待する項目としては、日本発の学術情報発信の強化が26%、機能向上が25%、ジャーナルのステータス向上が25%、電子出版等に関する研修リテラシー向上が12%、学協会間の交流が9%、その他が3%で、その他として「他の電子ジャーナルとの連携やデータ流通」「課金、リンク、検索などの機能追加改善要望」が出されました。





以上の満足度調査につきましては、今後毎年同様な方法で継続調査を実施させていただくとともに、結果につきましては、事業を継続・展開する上で重要となる評価に活用させていただきます。ユーザーの皆様がより良くJ-STAGEをご利用いただけるよう、スタッフ一同がんばって参る所存です。今回の調査へのご協力に心より感謝申し上げますと共に、今後ともJ-STAGEをよろしくお願い申し上げます。

■編集後記■

♪いつもJ-STAGEニュースをご覧頂きありがとうございます。近く、学協会参加型の新しい企画等を取り入れ、リニューアルを図りたいと思います。誌面の構成も見直し、読みたくなるような機関誌としたく、引き続きみなさまのご支援をよろしくお願い申し上げます。(m)

★J-STAGEおよびJ-STAGEニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST研究基盤情報部 電子ジャーナル企画課 (contact@jstage.jst.go.jp)

J-STAGEニュース No.16 2008年3月21日

J-STAGE
http://www.jstage.jst.go.jp

編 集 独立行政法人 科学技術振興機構
研究基盤情報部 電子ジャーナル企画課、業務課
発行人 研究基盤情報部長 大倉 克美
住 所 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ
電 話 03-5214-8837 (ダイヤルイン)
E-MAIL contact@jstage.jst.go.jp